

作品分析・感想文(掲載順不同)：

「さて「人間的な基督」ですが、時代を考えると大江健三郎にも劣らない才能の人のように思いました。テーマとしてはその後多くの劇作家さんたちが扱ってきたものと思いますが、先駆者的な意味は確実にあったのではないのでしょうか？惜しい方を早くに亡くしました」
(木本絹子述：大 IP30)

参考：咲耶会同窓会誌：

https://sakuyakai.net/wp-content/uploads/2019/09/sakuya2019_No.30-1.pdf

なお、下記のような素朴な御感想を述べていただいた卒業生の方(ロシア語卒)がおられます。優生思想が教授注入され、時代の同調圧力の荒波の中で、一編の作品を通して、自己表現を懸命に求めた証しと捉えておられます。

また「メンデルズム」の訳者が当時外語専任で教鞭を執っていました：

<https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000000593144-00>

「よく保存されていたことですね。一応私も同窓生の一人でありながら、外語学校の歴史や役割について全く無関心でした。また日本のかかわった戦争にも、満州国や植民地支配という言葉では知っていても、それを時間軸と地理的な広がりなどの事実すらあまり知らず、当時の日本社会の空気や圧力などを想像するのみです。歴史の年表や地図を引っ張り出して、吉村さんの短い人生を推し量ってみたりしました。「人間的なキリスト」という戯曲は、聖書にあるイエスが捕らわれる前夜の祈りと弟子とのやりとりを基に、イエスの内面を描いたものですね。私には浅はかな理解しかできていないと思いますが、とても生き生きとした表現力を感じ、興味深く読みました。これが書かれた時期(1927年頃)は日韓併合から17年、植民地朝鮮を足掛かりに満州国を作り、中国大陸にどんどん進出していった頃ですね。外語学校で中国語を学んだ21歳の青年の内には、近いうちに国策の実践の先鋒として、未知の世界へ出ていくことになる覚悟があったことでしょうか。キリストが明日は捕らわれて処刑される身であることを、キリストは知り、弟子たちは知らない。キリストの孤独や苦悩を極めて人間的なものとして描写する中に自分の内心の懊悩を仮託したのかなと思いました。この後6年ほどして満州の警察官として抗日ゲリラとの交戦で亡くなったのですね」
(岡本[野口]真理述：大 R23：2019年10月1日)

「手元の同窓会名簿を開いて、「烈士之碑」に合祀されている方々のお名前をひとりひとり確認し、なぜか涙したりしておりました。その中に送っていただいたPDF戯曲の作者である吉村勝露生氏の名前も確認できました。先の大戦のみならず、人類の歴史上どれだけの方々がある一部の人間の単純な欲望が引き起こした戦争に巻き込まれ、尊い命を落とされることになったのか、と考えるとやりきれない気持ちになります。日本が巻き込まれた数々の戦争について自分の皮相なかつ一面的な知識や視点からその是非を判断することはでき

ませんが、(個人的には是非のどちらでもあるし、同時にそのどちらでもないと思います) イエス・キリストをひとりの人間として、その内面を描き出そうという試みは、愛を説くものでありながら、ときの権力者によって都合よく利用され、その欲望に根拠を与えることになった教えの矛盾であったり、その教えの根底にある人間は神になれない、という人間と神を分断する概念に対して、素朴な形での問題提起であったのでは、と感じます。

これからは、このような意図的な分断によって世界が経営されることの限界を人類が自覚して、新しい文明を作っていこうとする時代になることを希望しています。

そうでなければ、今の人類の文明に終焉が訪れるのは、そう遠い未来の話ではなかろうと思います。

また、あらためて、母校ということを考え、先達が学問に対してどのように向き合ってきたのか、その連綿としたつながりの中にいる自分を自覚するという経験を、今の自分なりに、気持ちをあらたにした次第です。

今回は、楽しげな催し(「Katie とおーたかずおの音楽 de 世界旅行」2020年2月16日開催:会報「咲耶」No.31 参照)ではありますが、自分の表裏一体的なテーマとしては、こうした先達の思いやかつての学び舎、そして人間の都合で開発されつづける箕面の山々などに対する鎮魂、とっております」(太田和麻述:大PB43:2020年2月15日)

<https://sakuyakai.net/wp-content/uploads/2020/09/sakuya31.pdf>

「吉村勝露生(「かつろう」とお読みするのでしょうか)氏の『人間的な基督』は、無名のり二十歳の若者が手掛けたとは思えないほど重厚で、また『遺芳録』で紹介されている同氏の人生と重ねるとある意味で予言的でもあり、苦い読後感にひたっております。

まず、キリストの設定に意表を突かれました。独自に思いついたとすれば、とても冷静で、かつ発想力や想像力の富んだ方だったのでしょ。

また終盤の「死を救ふてやる人が死ぬ。そして救ふべき人を持たぬ。」というセリフのくんだり、処刑されるキリストとご自身の人生が重なるようで、本当に皮肉だと胸がつまりました。

個人的に、寒い大陸に渡らなければ(せめて台湾などの暖かい場所)、もっと他の人生があったはずだろうと思います。あのような時代に生まれなければ、もっと自分の才能を生かして個人の幸せを追求できる人生を歩めたことでしょう。

こうした早熟で真面目で優秀な方々が、時代にほんろうされて早世して行った事実を突きつけられるたびに悔しくなります」(相場美紀子述:2019年2月20日)

「2021年は真珠湾攻撃から80年の年でした。12月8日前後には、テレビの特集番組にも第二次世界大戦関係のドキュメンタリーが多く、人々の心に残る戦争の傷跡は永遠に癒えることはないのだと、改めて平和を守ることの大切さを実感しています。

そのような年に母校の大阪外国語大学が創立100周年を迎え、学舎も栗生間谷から新船場

地区に移転してきました。上本町学舎から、間谷キャンパスを経て、現キャンパスの庭に移設された「烈士の碑」には、190柱の戦死者、殉職者が合祀されています。その中の一人が、昭和11年11月30日に、旧満州国建国の挺身官吏として現職のまま黒河省佛山縣で反満抗日軍の襲撃により戦死した吉村勝露生（C4）です。吉村勝露生については、『大阪外国語大学70年史』の中の、「烈士の碑」が建立された由来を記したページに、その名を見出すことができます。

第一次世界大戦後の大正デモクラシーの時代に設立され、100年の歴史を持つわが母校ですが、100周年と学舎移転が、その歴史を振り返るきっかけとなったように思います。古い校友会誌『咲耶』の中に、戦前、戦中を生き抜いた同窓生の生々しい青春の記録が残されています。同窓会で保管してきた様々な資料を整理する中で、この「人間的な基督」の存在が明らかになり、烈士の碑に祀られた青年達の、想像もつかない青春の心の軌跡の一端を知ることとなりました。歴史的資料のデータ化にご尽力いただく中で、この作品を発掘してくださった大阪大学名誉教授・林田雅至先生のご労苦に心より感謝する次第です。

初めてこの作品に目を通した時、戦時下の青年の、救いようのない懊悩と葛藤に、心揺さぶられました。処刑を前にした基督に名を借りてはいますが、作者自身の心の叫びであることは明らかです。21歳の若者が、人間的な生き方を求めつつも、その本心をヴェイルに包んで、「救世主」として求められる生き方を強いられ、もがき苦しんでいる姿が何とも痛ましく思われます。どんなに生きていったであろうかと、平時であればその才能が開花いただろう前途有為な若者の心情を思い、戦争に邁進する国家の在り方に、今更ながら恐ろしさを感じます。

勝露生という名前は、資料によれば、父親が日露戦争の勝利の翌年に生まれた息子に、その将来を祝って付けたそうです。父親の期待に背かず、満州建国に身を捧げ、殉死した息子は、基督同様、運命の子であったと言えます。自らの運命を予言していたかのような著作から、内省的な感性の鋭さ、表現力の豊かさ、その基盤となる幅広い教養に心打たれます。戦後まで生きながらえていたら、どのような活躍が見られたであろうかと、惜しい気がいたします」（井上泰子述：大E15：2021年12月12日）